

「幼児の教育」第八十巻を迎える

津 守 真

「幼児の教育」誌は、本年で、第八十巻を迎える。

一九〇一年、明治三十四年の「婦人と子ども」創刊号から、昭和十九年までの四十四巻の復刻を昨年完行することができて、今年は、第八十巻を迎えることは、嬉しい。

まったく運命的なこととされているのだが、私がこの雑誌の編集の責任を負うようになってから、二十七年である。

倉橋惣三先生から引き継がれた最初の編集会のとときに、先生が云われたこと

がいくつかあった。いま考えてみるに、そのことは、現在、この雑誌の編集方針としていふことと変らないように思う。

その第一は、この雑誌は、人間の生活に根ざした保育を考へるといふことである。表紙の題字の上に、小さな活字で、家庭・保育所・幼稚園と記されているのに気付かれた方があるだらうか。倉橋惣三先生は、このことにとくに注意を喚起され、「幼児の教育」は、幼稚園の中の教育だけのことではないことを強調された。家庭にも、保育所にも、幼稚園にも共通のこととして、幼児を保育するといふ、人間の生活に欠くことのできない営みがある。それが幼児の教育で扱う根本課題である。このことは、むかしもいまも変わらないことであつて、子どもは、幼児期におとなから心をかけて保育されることがなければ、人間となることができないであらう。

幼稚園の中だけにしか通用しない幼児教育ではなく、人間にとってあたりまえの日常的な保育をしっかりと確保することが、現代の大きな問題である。

その第二は、この雑誌は、新しい学問研究を学ぶことを課題としていふことである。倉橋惣三の言をかりて云うならば、新なるものは、真を求めるものである故に貴いのである。すなわち、幼児教育を根本的に問うてゆくことが、常に新しい学問を学ぶ者の態度である。この雑誌が外国の動向にも注意を払ってきたのは、このような観点からである。

幼稚園教育も、児童研究も、百年の歴史をへた。いまや、児童研究・保育研究が、たんに教育効果をあげるための研究にとどまることなく、人間の文化に貢献するものとなりうるか否かという課題を負っているのであると思う。

その第三は、この雑誌は、創刊の時から、遊びを重視する新教育の伝統の上に立っていることである。発刊のとき、すでに日本の幼稚園の開設後、四半世紀を経ており、それまでの形式化した保育の批判に立って、幼稚園に新しい教育を導入することをこの雑誌の使命としていた。大正から昭和にかけて、米国の新教育論と相まって、倉橋惣三の誘導保育論により、幼稚園を幼児の遊びの場とすることの主張がこの雑誌を通してなされた。

幼児の生活の中心は遊びであることは、教育理論によらずとも、私共の体験から明らかである。しかるに、現代の幼稚園、保育所、家庭では、遊びを育てる保育を実践するのが困難な状況にある。そういう中で、この雑誌は、遊びの保育を実践する人々の支えになることができたと願っている。

この四半世紀は、社会・経済のみならず、幼児教育にとっても、激しい変化の時代であった。昭和二十五年に、幼稚園数二、一〇〇、保育所数、一、〇〇〇であったが、昭和五十一年には、幼稚園数一三、四九二、保育所数一二、〇一七となり、八・二倍に増大している。幼稚園の就園率からみれば、昭和二十五年には約一〇パーセントであったが、昭和五十一年には六四・六パーセント

であり、保育所もふくめればほとんど百パーセントである。このような急激な膨張は、幼児教育がその根本問題を問う暇なく、現実の要求に追われたことを示唆するものであると思う。

この間の学問の面の変動も激しかった。一九五〇年代のはじめには、米国の幼児教育界は、それまでの新教育の原理によっていたが、一九六〇年には、知的早期教育論が激しいいきおいでこれに代っていた。それからの二十五年間、教えきれないほどの幼児教育プログラムが提出された。この雑誌が通り抜けてきた最近の四半世紀は、このような激動の時期であった。その激動はまだつづいている。この中であって、幼児の生活にふさわしい幼児教育をつくり出してきたのは、幼児と共に毎日の保育を積み重ねてきた実践者たちである。その大地に根ざした保育を、実践と理論と共に進めてゆくことは、私共のこれからの課題である。これまでこの雑誌が追求してきたことを、変化する情勢の中で追求しつづけるのは、困難なことであるけれども、今後、この同じ歩みを、希望をもって、つづけてゆきたい。